



部分教会(教区)における

## 世界青年の日

開催のための司牧指針



信徒・家庭・いのちの部署

部分教会（教区）における  
世界青年の日  
開催のための司牧指針

教皇庁 2021



# 1. 世界青年の日

世界青年の日（ワールドユースデー〔WYD〕）の設立は、たしかに聖ヨハネ・パウロ2世の預言的なインスピレーションによるものでした。自らの決意を教皇はこのように説明しています。「若者たちはみな、教会から温かい眼差しで見守られていると感じることを必要としています。したがって世界中のあらゆる教会は、ペトロの後継者と共に、国際的なレベルで、さらなる努力を惜しみなく若者たちのために費やさなければなりません。かれらの渴望、疑念、欲求、その寛容さと希望に、わたしたちは心を止め、待ち望んでいることに応え、確かさ、それはキリスト、真実、それはキリスト、愛、それはキリスト、を伝えなければなりません…」[1]



教皇ベネディクト16世は前任者の証しを自ら引き受け、さまざまな機会に、こうした集会在教会にとって摂理のめぐみであるとし、こう述べました。「信じとおす疲れに対する妙薬」「若々しい、新しいキリスト者のあり方」「新しい福音宣教の体験」であると。[2]

教皇フランシスコも、WYDは宣教という観点から、全教会に向け、とりわけ若い世代に向けて、すばらしい推進力になると確信していました。教皇に選出されてわずか数ヶ月後の2013年7月、彼はリオデジャネイロで開かれたWYDと共に教皇職のつとめを開始しました。そして閉会式では、そのWYDが何であったか、次のように語りました。「キリストの十字架とともに諸大陸を巡る若者の巡礼の新しい段階です。WYDが単なる『花火』、自己目的の熱狂的な行事ではないことを忘れてはなりません。それはヨハネ・パウロ二世の発意によって1985年に始まった長い旅路の段階です」 [3]



そして、もっとも重要な点にふれました。「次のことをつねに心にとめたいと思います。若者は教皇に従うのではなく、イエス・キリストに従います。キリストの十字架を担いながら。教皇はこの信仰と希望の歩みにおいて、若者を導き、彼らに同伴します」 [4]

周知のように、この国際的な集会は、教皇参加のもと、通常3年おきに世界のさまざまな国を巡って開催されます。一方、通常のWYDは毎年地方教会で自主的に企画・実施されています。



## 2. 地方教会でのWYD

地方教会で開催されるWYDは、その地方に住む若者たちだけでなく、地方の教会共同体全体にとって大きな意義と価値があります。

学校、仕事、金銭的問題などの事情のために、WYDの国際的な祭典に参加できない若者たちもいます。したがって各地方教会が、そういった人たちがまず参加し、世界の多くの若者がWYDの国際的な祭典で深く味わっているような、「信仰の祭典」、証しと交わりと祈りの体験ができるイベントを地方レベルで提供することは良いことです。

地方レベルで開催されるWYDは同時に、各地方教会にとってきわめて重要な意義をもっています。それは、教会共同体全体——信徒、司祭、奉獻生活者、家庭、大人、高齢者——の信仰を次の新しい世代に伝えるという使命について、さらなる自覚をうながし、意識改革と養成に役立ちます。



「若者、信仰、そして召命の識別」というテーマで行なわれた世界代表司教会議通常総会(シノドス)・(2018年)は、全教会、すなわち普遍教会と地方教会、そしてそのメンバー全員が、若者について自らの責任を感じ、かれらの問いかけ、欲求、抱えている問題に真摯に向き合わなければならないと明言しました。このように、地方レベルで開催されるWYDは、愛と情熱をもって神のことばを告げながら、若者と共に歩み、かれらを迎え入れ、忍耐強く耳を傾ける緊急の必要性を、「教会の意識」の内に浸透させるために極めて有効です。[5]

地方レベルで開催されるWYDについて、本部署は、自らの任務 [6] として、司教協議会、総大司教区教会会議、総大司教、教区、教会の運動団体・協会、そして、世界中の若者たちに向けた、いくつかの司牧指針を作成しました。その目的は、教区開催のWYDが、「若者たちのために」「若者と共に」祝う集会として、生き生きとした体験ができるような催しとなるよう願ったことです。

「司牧指針」は、個々の地方教会において教区開催WYDの重要性を最大限高めるよう勇気づけることを意図しています。創造的なイニシアチブのもとで企画・実現するよい機会として捉えられ、それによって教会は、若者と共に歩むという自らの使命が「この時代の司牧的優先事項としてこの使命を考え、そこに時間、エネルギー、資源を投下しなければならない」[7] ことを認識するようになるでしょう。教会の司牧上、最大の配慮を払う対象は自分たちであること、それほどいつくしまれていることを、若い世代が感じなければなりません。実際、若者たちは、自らも教会の生命と使命に巻き込まれ、みとめられ、それらを共に担う役割を果たしたいと願っているのです。[8]

教会が最大の配慮を払う対象は自分たちであること、それほどいつくしまれていることを、若い世代が感じなければなりません。



以下に記される事項は、地方教会の特徴的な表れである一つの教区で実施されることを念頭に置いています。もちろん、世界のさまざまな地域の教会の状況はそれぞれ異なりますので、それに合わせることは必要です。

たとえば、小さい教区で、人的・物質的資源が乏しい場合です。そのような具体的なケースや司牧的観点から異なる選択が必要とされる場合には、近隣地域などが力をあわせて、WYDを企画し、いくつかの近隣の地域、教会管区、または国レベルで実施することも可能ではないでしょうか。



### 3. 「王であるキリストの祭日」における 地方レベルでのWYDの実施

2020年11月22日、「王であるキリストの祭日」のミサの終わりに、教皇フランシスコは部分教会でのWYDの開催を再度力強く推奨し、これまで「枝の主日」に実施されていたWYDを、2021年から「王であるキリストの祭日」にあたる日曜日に実施されることを宣言しました。[9]

それについては、聖ヨハネ・パウロ2世が、1984年の「王であるキリストの祭日」に「国際青年の年」（1985年）にあたって、若者たちに集まるように呼びかけられたことが思い起こされます。これは、「あがないの特別聖年」（1984年）に開催された「青年の聖年の集い」と共に、WYDの長い道のりの出発点となりました。聖ヨハネ・パウロ2世はスピーチでこのように述べました。「この祭典の中で教会は、すでに存在するが、その完全な顕現に向かって神秘的成長を続ける“キリストの王国”を宣言します。神の国の実現のために、あなたがた若者は不可欠な担い手であり、教会と世界の希望なのです」。そこで、次のことがWYDの始まりでした。「王であるキリストの祭日」に、世界中の若者たちが「聖週間の始まりである、枝の主日の前夜の土曜日と日曜日に、教皇と会うためにローマに来るように」と招かれたことが。[10]

事実、「枝の主日」と「王たるキリスト」の関連性は、容易に見出すことができます。枝の主日のミサでは、「柔和な方で、ろばに乗る王」（マタイ21,5）として、エルサレムに入城するイエスと、群衆が、「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ」と叫んで、彼をメシアとして迎えたことを記念します（マタイ21,9）。一方、福音記者ルカは、群衆の「主の名によって来られる方」という叫びに「王に」と加え、メシアが王であること、そのエルサレム入城をいわば王の即位にたとえています。「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように」（ルカ19,38）



ルカにとってはキリストが王であるという次元はあまりにも重要で、イエス・キリストの地上での出来事の最初から最後まで、イエスのすべての務めに、ずっとついて回ります。神のお告げでは、天使がマリアに、彼女が宿したした子は、神から王座をいただくと預言します。「神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」（ルカ1,32-33）



そして、十字架という悲劇的場面では、他の福音記者たちがイエスの両側で十字架につけられている者たちがのしつた場面を記すにとどまるのに対して、ルカは、十字架という処刑台につけられている中、あの「良き強盗」が「イエスよ、あなたの御国においてになるときは、わたしを思い出してください」と言ってイエスに祈る姿を記録しています。その祈りにこたえるイエスの受け入れ、赦すことばから、イエスが救いのために来た王であることが分かります。「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(ルカ23,43)

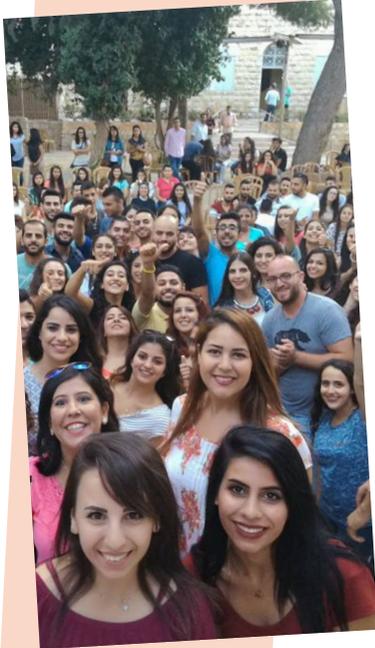
したがって、若者たちに強く告げられ、王であるキリストの祭日に開催される、すべての教区WYDで中心にならなければならないのは、次のことばです。「キリストを受け入れなさい！ あなた方の人生における王として、イエスを受け入れなさい！ イエスは救いのために来られた王です！ 彼なしでは真の平和はありません。内なる自分との真の和解はありません。そして、他の人々との真の和解はありません！ 彼の王国なしでは、社会も人間らしさを失います。キリストの王国なしでは、すべての真のきょうだい愛、苦しむ人への正真正銘の寄り添いは、ありません」

教皇フランシスコは、この二つの典礼祭儀、「王であるキリスト」と「枝の主日」の中心には、「人間のあがない主であるイエス・キリストの神秘が残る…」[11] ことを思い起こさせます。したがって、このメッセージの真髄は、人間の偉大さとは「最後まで」他者のために与え尽くす愛に由来する、ということです。

したがって、各教区には、王であるキリストの祭日に WYD を開催することが推奨されます。教皇が切に望んでいるのは、この日、全教会が若者を司牧的配慮の中心に置き、かれらのために祈り、若者たちが主役となれるようなイニシアティブを実行し、対話する活動を深めること等々です。可能なら、教区・管区・国レベルで、同じ日、王であるキリストの祭日に、開催することが望まれます。しかしながら、諸事情で、他の日に開催することが必要になる場合もあるでしょう。

上記の集会は、より広い司牧的歩みの中に位置付けられ、WYDはその中の一つの段階と理解されるでしょう。[12] 教皇フランシスコが「青少年司牧はシノドス流であること、つまりは、『共に歩むこと』を具体化すること、それ以外にはありません」[13] と述べて注意をうながすのは、偶然ではありません。

## 4. WYDの主要なポイント



「若者、信仰、そして召命の識別」というテーマで行なわれた世界代表司教会議(シノドス)において、シノドス教父たちのさまざまな発表の中で、WYDに関する言及が多くありました。この提言に関しては、最終文書に次の記述があります。「ワールドユースデー——第3千年期の若者にとってもまた、参照点としてあり続けている、聖ヨハネ・パウロ2世教皇の預言者的直観から生まれたもの——は、国際大会や教区大会と同様、信仰と一致の生きた体験を提供するからこそ、多くの若者の人生にとって重要な役割を果たしている。そのことが、若者たちが人生の重大な課題に直面し、責任をもって社会と教会共同体において自分の立場をとることを助けている」[14]

そして、これらの集まりは「各共同体の日常的な司牧的同伴に届けられ、そこで福音の受容が、人生の決断において深められ具体化される」のです。[15] さらに「それは巡礼のダイナミズムの中を歩き、すべての人との兄弟愛を体験し、幸せのうちとともに信仰を生き、教会への帰属感を成長させる機会を提供する」とあります。[16]



地方での集会を含む、すべてのWYDの中心であるべき、そして、確かに計画をする上でその意義を取り入れることになる、主要なポイントのいくつかに着目してみましょう。[17]



## a. 「若者の日」は「信仰の祝祭」 であるように

WYDは、若者たちに信仰と一致の生き生きとした喜びの体験、そして主の御顔の美しさを体験できる空間を提供します。[18] 信仰生活の中心には、イエス・キリストのペルソナとの出会いがあります。したがってすべてのWYDは、若者一人ひとりが、キリストと出会うよう、また、キリストとの個人的な対話を始めるようにとの招きが響き渡るよい機会です。「信仰の祝いです。そのときわたしたちはともに主を賛美して歌い、神のことばに耳を傾け、沈黙のうちに礼拝します。これらすべてのことがWYDの頂点です」[19]

そのような意味で、国際的なWYDの計画（ケリグマ、養成、証し、秘跡、芸術などの次元）は、現地の実態からインスピレーションを得て、それを創造的に取り入れることができます。とりわけ大切にされるべきは、最高の信仰の行ないである、沈黙のうちにを行う聖体礼拝、神のいつくしみとの個人的な出会いである和解（ゆるし）の典礼です。

さらに注目すべきは、どのWYDでも見られる、自然に若者たちが熱狂する姿です。それらは、若者たちが、自分たちも関わっていると感じ、信仰を生きるということの特徴づけるものですが、そうしたことすべては神の民全体の信仰を刺激し、強めます。福音に呼ばれ、主と共にいる体験に招かれ、多くの場合、若者たちは勇気ある信仰の証し人になります。それはWYDのイベントを、いつも、驚くべき唯一のイベントにします。



## b. 「若者の日」が「教会の体験」 であるように

教区レベルで開催されるWYDは、若者たちが「教会的一致」を体験し、自分も教会の不可欠な部分であるという認識を深め、成長する機会として重要です。若者たちを最初に引き込む第一の形は、「耳を傾けること」です。教区レベルのWYDの準備においては、若者たちの声が、既に存在する交流の機関（教区評議会、教区間評議会、司祭評議会、地方司教会議…）内で聞かれるよう、適切な時間や方法を見いだすことが必要です。かれらが「教会の若き姿」であることを忘れないようにしましょう！

若者たちの傍らに、地方に存在するさまざまなカリスマも活用されなければなりません。教区レベルのWYDの開催組織は、さまざまな生活の状態を巻き込み、教皇フランシスコが「キリストは生きている」で推奨するように、シノドス流の作業のもと、一致(合唱のように)していくことが基本です。「こうした精神に動かされてわたしたちは教会を、それを構成する多様性の豊かさを生かせる参加型で連帯的なものになるよう促進するのです。

若者や女性を含む信徒の貢献、男女奉獻生活者の協力、団体、活動体、運動体の協力を、ありがたく取り入れながらです。だれ一人排除してはならず、また自ら退く人を出してもならないのです」[20] そのように関わることで、部分教会の生き生きとした力を結集させたり、協力させたりでき、こうして、「眠っている状態」から目覚めさせるのです。

このような流れのもと、現地の司教が参加し、率先して協力する意欲を見せることは、若者たちにとって愛と親しさの大きなしるしとなります。若者たちにとって、教区レベルのWYDの開催は、自分たちの固有の牧者と出会い、対話する機会となります。教皇フランシスコはこのような親しい関係を保つ司牧を推奨し、「親しい者どうしのことば遣いを、友達どうしで日常に使う、下心のない愛ある話し方を、優先させなければなりません。それが心を動かし、いのちに触れ、希望と願いを目覚めさせるのです」と言います。[21]



### c. 「若者の日」が一つの 「宣教体験」となるように

国際レベルのWYDは、若者たちにとって「宣教体験を生きる」すばらしい機会となっています。教区レベルのWYDもそうでなければなりません。教皇フランシスコもこう言っています。「青少年司牧は常に宣教司牧でなければならぬ」[22]

このことから、宣教を組織することができます。家々を訪問しに行くように若者を招き、希望のメッセージ、なぐさめの言葉を持っていくか、単に相手の人々の話を聞くように招くのです。[23] かれらの熱意をバネにすると、若者たちは——ふさわしい環境が備わっていれば——同世代の若者が集まっている道や広場に行き、歌や祈りや証しを通して、公けの場での福音宣教活動の主役を担うこともできます。なぜなら若者たちへの最高の宣教者は、若者たちですから。かれら自身がそこにいて、信仰の喜びを発散したら、それこそが他の若者たちを引き寄せる、福音の「生きた告知」となるからです。

また、ボランティア、無償のサービス、奉仕など、率先して自らを捧げる機会を若者たちに提示するのもいいでしょう。忘れてはならないのは、王であるキリストの祭日の前の週の主日を教会は「貧しい人のための世界祈願日」としていることです。若者たちが自らの時間、エネルギーを、もっとも貧しい人々のため、疎外されている人々のため、社会から見捨てられている人々のために費やすのに、これ以上よい機会があるでしょうか。こうすることによって、若者たちに、「消費主義や薄っぺらな個人主義の病に冒されずに、共通善のために闘い、貧しい人に仕える者となり、愛と奉仕の革命の主人公になる可能性」[24]を提供できるのです。



## d. 若者の日が「召命の識別の機会」

「聖性への招き」となるように

信仰・教会共同体・宣教の強い体験の中において、最優先されるべきは召命の次元です。それは、若者たちに自らの人生がかれらを愛し、かれらを呼ぶ神の前に置かれていることを把握させるための段階的なアプローチです。神はまず第一に、かれらを「生きること」へと招きました。「幸せになるように」と常に招き、神の声を知り、聞くようにと常に招き、とりわけ、御子イエスを師、友、救い主として迎え入れるよう招きます。これらの「根源的な召命」を心に受け止め、常にそれを念頭において生きることは、若者にとって最初の大きな挑戦です。なぜならこの最初の神の「呼びかけ」を真摯に受け止めることは、それだけですでに責任ある人生の選択に向かうことになるからです。すなわち、自らの存在を神の賜物として受け入れ、自己完結型ではなく、神に重点を置いて生きること； 親しい人との人間関係や社会関係においてもキリスト者として生きる選択をすること； 進学の方向性、仕事の選び方、自らの未来に関するすべてについて、神と結んだ友情に、またその友情を守り抜くためにふさわしい選択をすること； 自らの全人生を他者のために、奉仕と無私の愛のために捧げる選択すること。これらは、若者たちにとっての全生涯に、決定的な方向性を示す神の呼びかけに応える、根源的な選択である場合が多いのです。



教皇フランシスコは若者たちにはっきり言いました。  
 「人生は（…）強い、決定的な、永遠の選択の時です。  
 凡庸な選択は凡庸な人生に向かわせます。偉大な選択  
 は、人生を偉大なものにします」 [25]

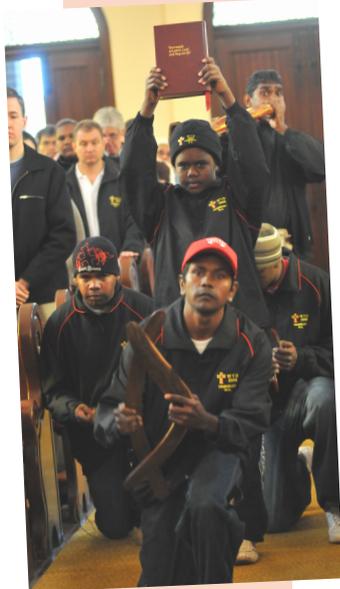
この広い「召命の地平」を前にして、若者たち一人ひとりに神が個人的に提示される人生の有り様の逃れられない選択を提示することを、怖れることはありません。それが司祭職であろうと、奉獻生活であろうと、また、修道院の形式においても、結婚や家庭という形においてもです。このような観点から、神学生、奉獻生活者、夫婦、家庭などの手助けを受けるのもよいでしょう。かれらは、自らの存在とその証しを通して、若者たちが自分が正しい召命への問いができるよう助け、神がかれらのために用意した「偉大な計画」を見つけたいというもっともな望みを育む助けとなるでしょう。それらの選択ができるように成熟するためのデリケートな過程において、若者たちは同伴され、賢明に「照らされ」なければなりません。

そして、時が満ちたら、神の助けにゆだね、漠然とした状態でいつまでも留まることがないように、自らの選択を実現するために勇気づけることが必要です。



すべての召命の選択の土台には、より根源的な、聖性への招きがあります。WYDは若者たちの内に、幸せへの、そして自己の完成への真の道である、聖性への呼びかけが響き渡るようにしなければなりません。

[26] 一人ひとりの若者の物語と素質に見合った聖性であり、神がそれぞれ個別に用意した、神秘的な道に限界を置く必要はありません。それは——多くの若者に現実に起きたし、今も起き続けているように——聖性の英雄的な物語へと導くかもしれません。または、誰も除外しない、「身近な聖性」へと導くかもしれません。したがって、地方教会や普遍教会の信仰の兄である、聖人たちの豊かな遺産を活用たらどうでしょうか。彼らの物語は、聖性への道は可能であり、それを歩むことが出来るだけでなく、大きな喜びをもたらすことを示しています。

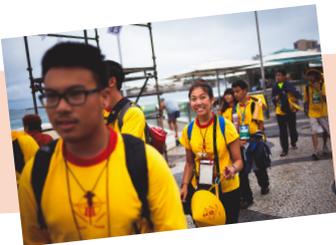


## e. 若者の日が「巡礼の体験」 となるように

WYDは、最初の時から、大巡礼でした。さまざまな街、国、大陸から、教皇と会い、他の若者たちと会うために選ばれた開催地へと移動する空間としての巡礼と、一つの世代の若者たちからその証しを受けた別の世代へと、この35年間の教会のあゆみが深く刻まれた時間としての巡礼です。ですからWYDの若者たちは巡礼者です。目的地がなく、彷徨う者ではなく、共に目的地へ向かう一つの民です。かれらの人生に意義を与える唯一の方、若者一人ひとりを自分の弟子になるよう招き、すべてを捨てて「後について来る」よう招く、人となられた神との出会いに向かってです。巡礼に求められるのは本質的であること。若者たちに、楽で空虚な確かさに支えられた普段の生活を捨てて、摂理と「神への驚き」に開かれた、簡素で心地の良い旅の様式に入るよう求めます。この「様式」は、自分自身を超えて、道の途中で出会うさまざまな挑戦に立ち向かえるよう若者を教育します。

したがって、教区WYDの開催にあたっては、若者たちに真の巡礼を体験してもらうための具体的で固有の提案・企画をすることができます。

すなわち、若者たちが家から出て歩み始めるよう促します。道中では、歩くつらさ、汗をかき、体が疲れ、そして霊的な喜びを知る体験をします。実際に、共通の目的地を目指し、困難さを互いに助け合い、少しの物を分かち合ったりする喜びのうちに、新しい友を見つけたり、同じ理想を持っていることに気づくという躍動的な体験をします。多くの若者がヴァーチャルで非現実的な世界にこもって孤立し、「世界の道路」のほこりから遠ざかって生きる危険のある現代においては、これらはみな実に大切なことです。単なるクリックでは、苦しんで汗をかいて目的地に達すること、魂と体の持続的ながんばりを通して得られるあの深い満足感を奪われてしまうのです。このような観点から、教区WYDは、若い世代の人々が地域の巡礼所や民間信心で意義のある場所を発見するよい機会となるでしょう。忘れてならないのは「巡礼に代表される、さまざまな表現をもつ民間信心は、教会組織に入りにくさを感じがちな若者にとって魅力的なもので、それは神への信頼の具体的な表れです」。[27]



## f. 若者の日が「普遍的きょうだい愛の体験」となるように

WYDは若者たちとの出会いの集いですが、カトリックの若者のためだけではありません。「一人ひとりの若者はそれぞれ言いたいことがあります。大人たちに言いたいこと、神父たち、シスターたち、司教たちに、そして教皇に」 [28]

このような観点から教区WYDの開催は、ある一つの地域に住む若者たち皆が、その信仰、人生に対する捉え方、確信していることなどを超えて、近づき対話するのによい機会になるかも知れません。若者は誰でも、きょうだいとして招かれ、加わり、迎え入れられていると感じなければなりません。「あらゆるタイプの若者が居場所を得られ、わたしたちそれぞれが扉を開いたままの教会だと示せる、そうした共生の場を生み出しうる青少年司牧」 [29] を築き上げなければなりません。



## 5. 青少年が主役であること

先にも述べたように、青少年司牧活動に携わる者は、WYDの司牧計画のあらゆる場面で、シノドス流の宣教スタイルに従い、かれらの年齢にふさわしい創造性、ことば、方法を評価しながら、常に若者たちを巻き込むよう配慮することが大切です。誰がかれら以上に同世代の若者たちのことばや抱えている問題を知っているでしょうか。誰がかれら以上に、芸術やソーシャルメディアを通じて、若者たちに働きかけることができるでしょうか…。

WYDの国際大会に参加したことのある若者たちは、その証しと体験をバネに、教区イベントの準備にあたり、貴重な貢献をしてくれるでしょう。

いくつかの部分教会では、WYD国際大会に参加したことのある、さらには国レベルや教区レベルでの若者に向けた企画運営に携わった経験のある若者たち、また、これらの体験からの「帰還兵」たちが、小教区、教区、国など、さまざまな領域で、青少年司牧チームの設立に関わっています。このことがあらわしているのは、若者たちが真に意義のあるイベントで自ら主役を演じたとき、それらのイベントでインスピレーションされた固有の理想を自らのものとするということです。つまり、頭と心がその重要さを理解し、それに熱中し、それを他者と分かち合うために時間とエネルギーを喜んで捧げるようになるという事実です。



信仰と奉仕の強い体験から、自らの地方の教会の通常の司牧活動に喜んで参加するようになることが、よくあります。

ですから、もう一度強調します。若者たちを巻き込んで、活動的な役割をゆだねる勇気を持ちましょう。教区に存在するさまざまな司牧活動に参加している者、いかなる共同体、青少年グループ、協会、運動団体にも関係していない者、どのような若者でもいいのです。教区 WYDは、既存の司牧的な構造に加わっていない、または率先して「活動していない」若者たちが、自分たちが除外されていないと感じる、地方教会の「豊かさ」をあらわすよい機会だと思います。皆が「特別招待者」と感じ、唯一無二のひとりの人間、豊かな人間性と霊性を持つ存在として、愛され、歓迎されていると感じるようであればなりません。したがって教区のイベントは、おそらく教会のなかでいまだに「自分の場所」を探しながら見つけられないでいる若者を励まし、迎え入れるためのよい機会となることができます。

## 6. WYDへの毎年の教皇メッセージ

毎年、教区WYDの開催の前、教皇は若者に向けてメッセージを発表します。したがって準備のためのミーティングや教区WYD自体も、教皇が若者たちに向けて語ったことば、とりわけメッセージで引用された聖書箇所からインスピレーションを受けることが望ましいです。

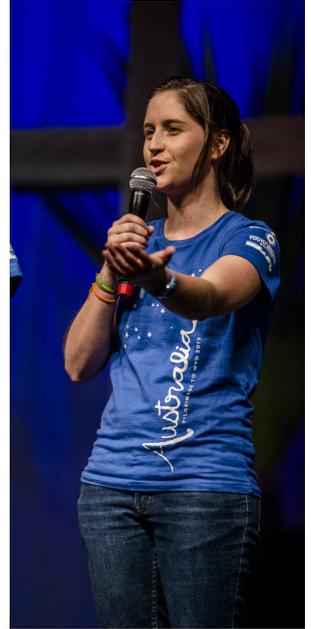


さらに、若者たちが神のことば、教会のことばを、彼らの特徴、歴史、感性、闘い、期待、希望を深く熟知していて、目の前の若者たちが今生きている、体験している具体的な状況に、聖書のテキストと教導職の文書を適応することができる、かれらと親しい人々の生きた声を直接聞くことが重要です。



カテケーゼスや対話のなかで行なわれる、この「仲介作業」は、耳で聞いた神のことばを、日々の生活で証しし、生きること、また、家庭、職場、学校、友人たちの間でそれを受肉させることを若者たち一人ひとりが具体的に知ることを助けてくれます。

普遍教会が若者たちの歩みに同伴するために提案されたこのメッセージの内容は、地方の現実を考慮した、深い知性と文化的感受性を通して実施されなければなりません。地方教会における青少年司牧の道すじにインスピレーションを与えることもできるでしょう。忘れてならないのは、教皇フランシスコが示した2つの方向性、「探索」と「成長」です。[30]





教皇が第35回「世界青年の日」メッセージで「霊的、芸術的、社会的分野ですばらしいものを、世界に、教会に、そして他の若者に示してください」[31] と招いているように、メッセージが、さまざまな芸術的表現や社会的性格のイニシアティブを通して広まっていくことを排除しないでください。さらに、その内容は、それぞれの司教協議会の示す方向性も考慮に入れつつ、その年の司牧活動の他の意味深い機会、たとえば、宣教の月、神のことばにささげられた月、召命のためにささげられた月、などで再提案することもできます。

さらに、教皇のメッセージ自体が、地方教会の青少年司牧に携わる人や、教会の協会や運動団体が提案する若者向け集会において、メインテーマとなることもできます。

## 7. おわりに

教区WYDの開催は、それぞれの部分教会にとってとりわけ重要な一つの段階であることは確かです。若い世代とのすばらしく大切な出会いの時であり、若者の世界の福音化とかれらとの対話のツールです。忘れてはならないのは「教会は若者に話すことがたくさんありますし、若者も教会と分かち合うことをたくさんもって」[32] いることです。

本書に書かれた「司牧指針」は、理想的な動機と具体的な可能性を提示して、教区WYDが、若者が自ら持っている善の可能性、寛大さ、真の価値への渇き、大きな理想などに光を当てる機会となるように、そのための参考資料でありたいと望んでいます。したがって、教区WYDの開催が十分評価されるよう、各部分教会が特別な注意を寄せる重要さをもう一度強調したいと思います。



若者に投資するとは、教会の未来に投資することであり、召命の促進を意味し、明日(未来)の家庭の遠い準備を効果的に行うことを意味します。したがって、各部分教会にとっては、他の諸活動に加わる単なる一つの活動ではなく、自らの生命に関わるつとめと言えるでしょう。

祝福されたおとめマリアに、全世界における青少年司牧の歩みをゆだねましょう。教皇フランシスコが「キリストは生きている」で述べているように、マリアは「ご自分が愛しておられるこの旅する民を、若い民を見ていてくださいます。喧騒、おしゃべり、気を引くものが多い道中であって、この母に、自分たちの心の静寂を求める民です」。  
[33]

教皇フランシスコは本文書の公表を許可した。

ヴァチカンにて、2021年4月22日WYDの  
十字架引き渡し式記念日に。

長官 ケビン・ジョセフ・ファレル枢機卿  
*Prefect: Cardinal Kevin Joseph Farrell* 次  
官 アレシャンドレ・アウィ・メロ神父  
(Schönstatt在俗司祭会員)  
*Secretary: Fr. Alexandre Awi Mello I.Sch*

## 注釈一覧

- [1] ローマと全世界へ向けたヨハネ・パウロ2世の降誕祭の祝いのスピーチ  
 “GIOVANNI PAOLO II, Allocuzione al Collegio dei cardinali, alla Curia e alla Prelatura romana per gli auguri natalizi”, “Insegnamenti” VIII、2（1985年）1559-1560 ページ
- [2] ローマと全世界へ向けたベネディクト16世の降誕祭の祝いのスピーチ  
 “Cfr. BENEDETTO XVI, Discorso del Santo Padre agli Em.mi Signori Cardinali, alla Curia Romana e alla Famiglia pontificia, per la presentazione degli auguri natalizi”, “Insegnamenti” VII、2（2011年）951-955 ページ  
 参照
- [3] 教皇フランシスコ、お告げの祈り、“Insegnamenti”I、2（2013年）155 ページ
- [4] 同上
- [5] 第15回定期シノドス（世界代表司教会議）の最終文書（以降、略してDF）4 参照
- [6] 信徒・家庭・いのちの部署は「教会が若者への配慮をとりわけ大切にし、現代世界のさまざまな挑戦の中にあって、かれらが自らの主役性を発揮できるよう助けます。若者の司牧に関して教皇がとられるイニシアティブに賛同し、司教団、国際的な若者の運動団体や協会などのために、協力を促進させ、世界レベルでの集会を企画します。その活動の中心的役割は、WYDを準備することです（規約 第8条）。
- [7] DF 119
- [8] 同上
- [9] 教皇フランシスコ、「王であるキリストの祭日」の荘厳ミサでの説教、“Osservatore Romano”紙、2020年11月23日、6 ページ参照。WYDが「王であるキリストの祭日」の同じ日に開催されるよう推奨します（その日が「王であるキリストの祭日」となっていない、または他の日に設定されている教会においても同様）。しかしながら地区裁治権者は異なる決定を下すことが出来ます。
- [10] 教皇ヨハネ・パウロ2世、お告げの祈り、“Insegnamenti” VII、2（1984年）1298ページ

- [11] 教皇フランシスコ、「王であるキリストの祭日」の荘厳ミサでの説教、  
"Osservatore Romano" 紙、前掲記事参照
- [12] DF 142参照
- [13] 教皇フランシスコ、使徒的勧告「キリストは生きている」(以降略して  
ChV), 206
- [14] DF 16
- [15] 同上
- [16] 同上、142
- [17] WYDによる、若者たちの霊的歩みへの貢献については、下記参照：  
  - ・ 教皇ベネディクト16世、降誕祭メッセージ（ローマと全世界  
へ）"Insegnamenti" I、2（2013年）209-211 ページ（前掲書）
  - ・ 教皇フランシスコ、一般謁見演説、"Insegnamenti" I、2（2013年）  
209-211 ページ
- [18] DF 16、142参照
- [19] 教皇フランシスコ、一般謁見演説、"Insegnamenti" I、2（2013年）  
210 ページ
- [20] ChV 206
- [21] ChV 211
- [22] ChV 240
- [23] ChV 240参照
- [24] ChV 174
- [25] 教皇フランシスコ、「王であるキリストの祭日」の荘厳ミサでの説教。  
"Osservatore Romano" 紙、前掲文
- [26] 教皇フランシスコ、使徒的勧告「喜びに喜べ——現代世界における聖  
性」2参照
- [27] ChV 238
- [28] 教皇フランシスコ、WYD準備のための「徹夜祭の祈り」での講話、  
"Osservatore Romano" 紙、2017年4月10-11日、7ページ
- [29] ChV 234
- [30] ChV 209参照
- [31] 教皇フランシスコ、第35回「世界青年の日」メッセージ、  
"Osservatore Romano" 紙、2020年3月6日、8ページ
- [32] 教皇ヨハネ・パウロ2世、使徒的勧告「信徒の召命と使命」46
- [33] ChV 48

# 目次

1. 世界青年の日	3
2. 地方教会でのWYD	6
3. 「王であるキリストの祭日」における地方レベルでのWYDの実施	10
4. WYDの主要なポイント	14
a. 「若者の日」は「信仰の祝祭」であるように	16
b. 「若者の日」が「教会の体験」であるように	18
c. 「若者の日」が一つの「宣教体験」となるように	20
d. 若者の日が「召命の識別の機会」	
「聖性への招き」となるように	22
e. 若者の日が「巡礼の体験」となるように	25
f. 若者の日が「普遍的きょうだい愛の体験」となるように	27
5. 青少年が主役であること	28
6. WYDへの毎年の教皇メッセージ	30
7. おわりに	33

この出版物で使用されているすべての画像データ（本部署と各国カトリック青少年司牧部署所蔵）は、各著作権者から提供されています。





